

通常学級における特別な教育的支援を必要とする児童に対する理解と支援の在り方

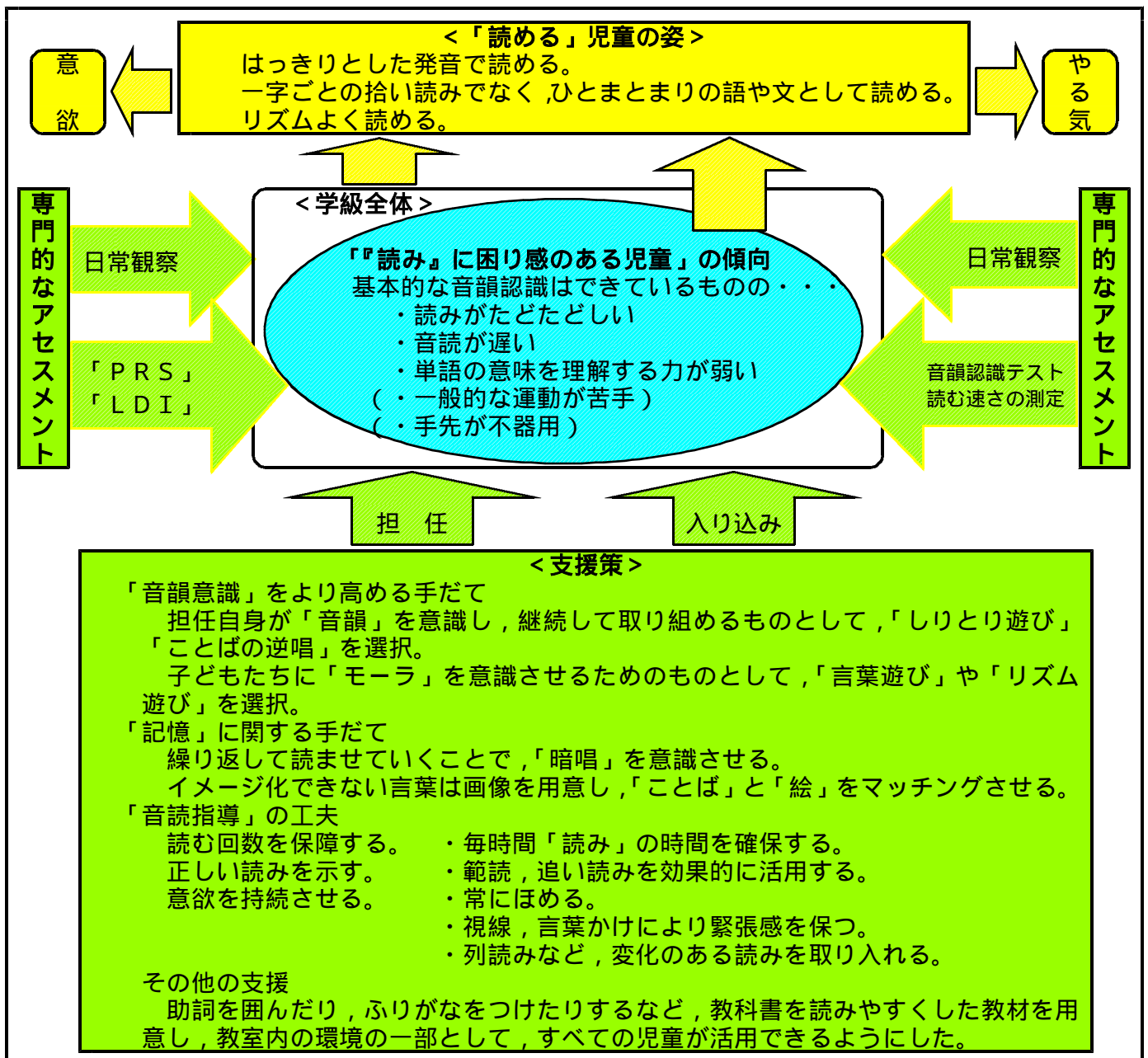
～「読み」に困り感のある児童への教育的支援を中心として～

鳥取県教育センター 教育相談課  
長期研修生 中谷 一郎

< 研究の目的 >

小学校の出発点である1年生を対象として、「読み」に焦点をあて「リズムよく、正確に音読する」という、どの教室でもふつうに行われているであろう教育的活動の中で、「読み」に困り感があり、学習に対して意欲的でなかったり、自分に自信をもてないでいる子どもたちへの効果的な支援の在り方を模索する。

< 研究の概略 >



< 研究のまとめ >

「読みの速度の検査（仮称）」結果より

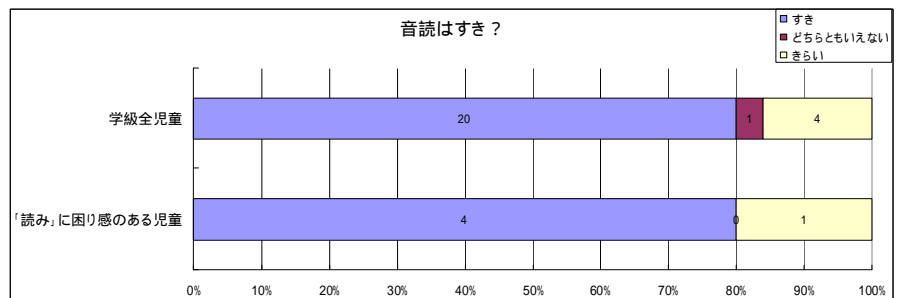
|   | 1回目 |     | 2回目 |     |   | I    |      | II   |
|---|-----|-----|-----|-----|---|------|------|------|
|   | 速さ  | 間違い | 速さ  | 間違い |   | 1回目  | 2回目  |      |
| ① | 45秒 | 4回  | 32秒 | 2回  | ① | 213字 | 248字 | 254字 |
| ② | 35秒 | 1回  | 27秒 | 0回  | ② | 210字 | 283字 | 316字 |

スクリーニングテストで「読み」に困り感があるであろうと見取った児童に対して実施した。左の表が、その場で初めて見る文章（100字）に対する読みの速度，右側が，国語の教科書の教材で既習の文について，1分間に何字よむことができるのかを計測した結果である（ が今回指導した教材）。全体への支援の中でも，「読み」に困り感のある児童の「読み」が伸びていくことを確認できた。

アンケート結果より

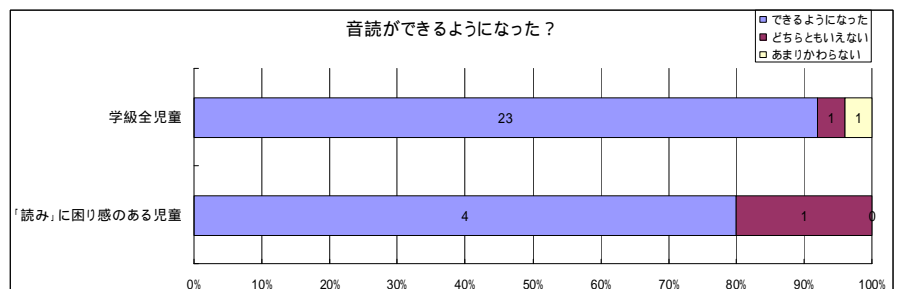
入り込みでの音読指導後，学級の全児童25名に対してアンケートを実施した。

「音読は好き？」という問いに対して，「読み」に困り感のあるであろう児童のうち4名は「好き」と答え，その理由として「読めるようになった」ことをあげている。



また，「音読ができるようになった？」という問いに対して，「読み」に困り感があるであろう5名全員が「できるようになった」と答え，読みが上達したことを感じている。

反面，いわゆる「読める」児童のうち5名が，あまりかわらないと答える結果となった。



< まとめ >

特別支援教育の中で，一人一人のニーズに対応した支援の必要性が叫ばれて久しい。そんな中，本研究では，「読み」に困り感のある児童への支援として，客観的・専門的なアセスメントと，ふだんの授業における全体への支援の重要性についての検証を中心に取り組んできた。

その結果，一定時間に読む量が増え，しかも，そのことを本人が自覚すると同時に，意欲に結びついているという点で，今回のように客観的・専門的なアセスメントをもとにした支援は，「読み」に困り感のある児童に対して有効であったと考えられる。また，学級の多くの児童が，「読みが楽しい」「速く読めるようになった」と感じるなど，全体への支援にも一定の成果があった。しかも「読み」に困り感のあるであろう児童のうち3名は，全体への支援の中で，読みを上達させてきている。

一人一人のニーズに対応した教育が叫ばれる中で，個別の対応，個別指導がクローズアップされがちだが，特に1年生においては，一斉指導における日々の全体への支援の在り方の一つ一つを見直していくことが必要であると感じている。

また，いわゆる「読める」児童に対する手だてや個別指導の充実，そして不器用さへの手だてなど課題も多い。本研究で学んだことを，ぜひ今後の実践に生かしていきたい。